

せば祖意が明了に得られる。文に云く

來迎トイフハ來ハ淨土ニキタラシムトイフコレスナハチ若不生者ノチカヒヲアラハスミ  
ノリナリ穢土ヲステ、眞實ノ報土ニキタラシムトナリスナハチ他力ヲアラハスミコトナリ  
マタ來ハカヘルトイフカヘルトイフハ願海ニイリスルニヨリテカナラス大涅槃ニイタルヲ  
法性ノミヤコヘカヘルトマフスナリ法性ノミヤコトマフスハ法身トイフ如來ノサトリヲ自  
然ニヒラクナリサトリヲヒラクトキヲ法性ノミヤコヘカヘルトマフスナリコレヲ眞如實相  
ヲ證ストモイフ無爲法身トモイフ滅度ニイタルトモイフ法性ノ常樂ヲ證ストモイフ無上覺  
ニイタルトモマフスナリ(已上往相果)コノサトリヲウレハスナハチ大慈大悲キハマリテ生  
死海ニカヘリイリテヨロツノ有情ヲタスクルヲ普賢ノ德ニ歸セシムトイフナリコノ利益ニ  
オモムクヲ來トイフ(已上還相ノ益)コレヲ法性ノミヤコヘカヘルトイフナリ。

『天親讚』終「願土ニイタレハスミヤカニ」の一首も之に同じ。此意を以て證知生死  
以下の三句を解すべし。

必至無量光明土 諸有衆生皆普化

【科意】還相の益を嘆ず。

必至の字異本あり

「必至……淨興寺本、寛永刊本

「必到……福乘寺傳覺師延本、光延寺本、福傳寺本、慶長刊本、勤行用本

據の『覺經』二廿五、速疾超便可到」と云ひ、次に「至無量光明土」とあり。『大經』偈には「至  
彼嚴淨國」と云ひ、次には「皆悉到彼國」と説く。至と到とを同義に用ゐらる。

【解義】必至無量光明土。諸有衆生皆普化。此二句は還相の益なり。即『論註』卷末  
所引の二十二願の意なり。其化益の相は上の天親章に照らして知るべし。無量光明土  
の語は『平等覺經』二廿九に出て、文の當分では諸佛の淨土なれども、我祖は「眞佛土  
卷」に彌陀の眞土と定めたまふ。彌陀は諸佛中の王光明中の極尊なる故なり。彌陀  
偈和讃に「彌陀ノ淨土ニ歸シヌレハスナハチ諸佛ニ歸スルナリ」にて、宗祖の鸞師に  
依りたまへるを知らば、此土名を眞土としたまひし意も了解し得べし。帝都にあれば  
諸國の事情を知るに自在なるが如き歟。無量光明土を諸佛の土とせば無量の光明土、  
彌陀の淨土とせば無量光明の土と解すべからん。還相を明すに此土名を出だすは甚  
だ適切なり。經文は「眞佛土卷」六六「愚禿鈔」上上に引用あり、可見。必の字下の句に

かゝる語なり。又他力自然の義あるべし。『二門偈』の終、「行卷」三對照あれ。  
諸有衆生とは即ちあらゆる衆生なり。又二十五有の衆生なり。『彌陀偈和讃』三の  
左訓に出てて其本天台の『法華文句』料本一之二に「諸有即二十五有生處也」に依り  
給ふこと如常。皆普化とは『論註』下に蘭林遊戲自在の相を『法華』の普門示現の類  
の如しとあり。いかなる者をも皆悉く化益せらるゝぞとなり。天親章の遊煩惱林現  
神通の處參照あれ。

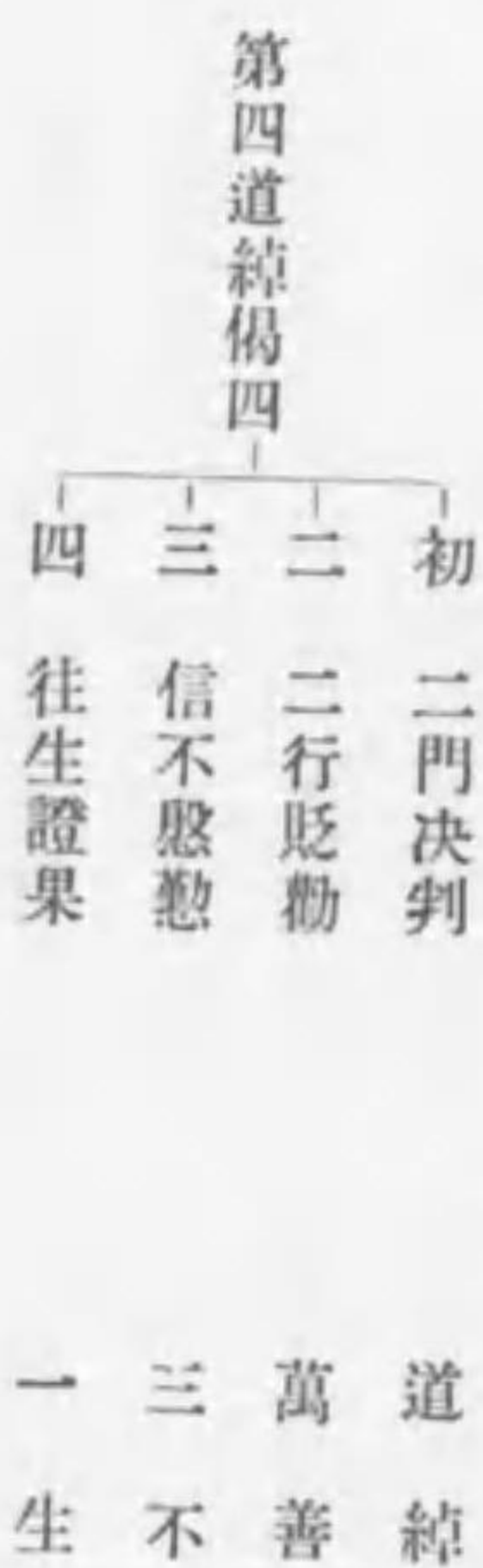
○曇鸞章偈の同異(同異第二十三)

鸞師の偈では『廣本』の「正定之因唯信心惑染凡夫信心發」の義は今偈の「煩惱成就  
凡夫人信心開發即獲忍」の二句にあたる。然るに彼の偈の「報土因果顯誓願」の句は  
今偈には見えぬ。又如來本願顯稱名の句は彼の偈には見えず如何。これは案ずるに  
報土因果が報土成就の因果ならば、已に今偈依經分に嘆ぜられて、全く『論』論註』  
の三種成就願心の莊嚴する所なる旨が出てたる故、今處には略せらる。又報土往  
生の因果ならば、如來本願顯稱名以下に讚ぜられたる故に報土因果を今偈に略した  
まへるなるべし。次に如來本願顯稱名は、本願の名號にて行體を示すものなれば、次

の二廻向他力の法體を顯すことになり、名號を信することによりて即獲忍の正定不  
退の益をうるぞと知らしむる意なるべし。『廣本』では天親の章に「歸命無碍光如來依  
修多羅顯眞實」と連續してある故、五念五功德の往還因果は名號より廻向せらるゝ旨  
を知らしめたる故、鸞師の章には如來本願顯稱名の句を略したまへるもの歟。

又今偈に如來本願顯稱名とある處に、稱名は本願の行なれば、信心を以て奉行せ  
ねば如實修行とはならぬ意を顯して、次の信心開發を引起する意ありと窺はるゝ。  
考へたまふべし。又三不三信は次の道綽章に出てたれども、『和讃』では曇鸞章に在  
り。今此處に自ら三不を離れて三信の如實修行なるべき意をも含めて示す祖意あら  
ん歟と窺ひ奉ることなり。

道綽 決 聖 道 難 證 唯 明 淨 土 可 通 入



【科意】 第四西河道綽禪師の偈八句。四法各二句づゝになり。初二句は先づ聖淨二門の教判を讀ず。

廣略兩本の偈同じく道綽章は二句づゝ次での如く四法に配せらる。然るに『和讃』では初三首は約教後四首は約行となる故に、今偈を見るに初四句を『安樂集』の大義とし、後四句を別述「要義」と見たる説あれども、今は全八句を四法に配して科する説に隨ふ。其故は『和讃』では三不信は『曇鸞和讃』に出て、淨土妙果は鸞師・善導の『和讃』には見ゆれども、『道綽和讃』には只往生の語はあれども眞證の相を云はず。これ今偈と其所明の異なる所なり。

【解義】 道綽決聖道難證。唯明淨土可通入。道綽の傳は『漢燈』九<sub>七九</sub>に四傳を引く。本涅槃を宗としてそれを講ずること二十餘遍、鸞師の碑文を見て歸淨し觀經を講ずること二百餘遍に及ぶ。鸞師の遺跡たる赤壁の玄忠寺に住し、唐の太宗貞觀十九年四月二十七日八十四歳にて遷化せらる。師は陳の天嘉三年の誕生なれば、佛入滅を周の穆王五十三年壬申とせば、正法五百年像法千年も過ぎたる千五百十一年目の誕生なる故、所謂末法の初運に當たりての出世なりと云はる。それ故綽公に至りて末

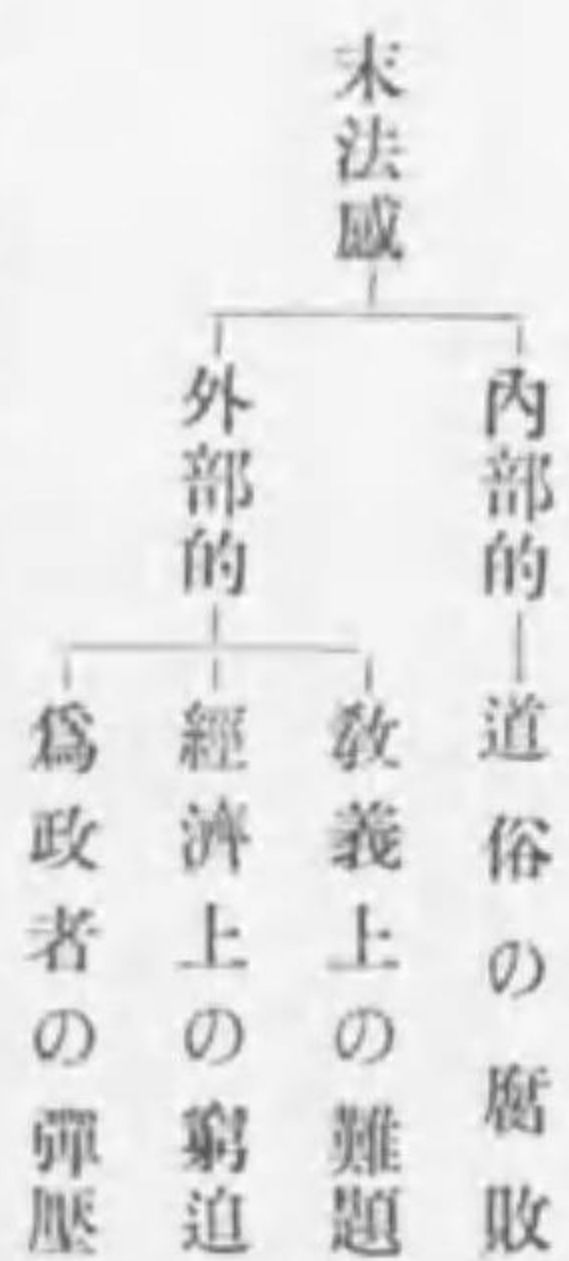
法の時機を痛感したまひ、二門の興廢を決判し給ひたと申すことなり。聖道とは『十地論』二<sub>一</sub>に出づる語で、『選擇註解鈔』一<sub>七</sub>では大聖に至るの因道と云ふこと。『大乘義章』十六<sub>四</sub>に道の語の梵漢對照の釋あり。淨土とは往生淨土なり。聖道は末法に入りては唯教のみありて行證なし。故に難證と云ふ。難證の由は去聖遙遠と理深解微の故なり。往生淨土は時機相應する故、廣く諸機に通じ遠く遐代に及ぶ故に可通入一路と云ふ。『安樂集』上<sub>三</sub>に出て、『大集月藏經』九<sub>二</sub>の取意の我末法時中の文と『大經』十八願を『觀經』の下々品に合したる取意の文とを引證したまへり。『月藏經』の説は『大經』流通の餘意を顯す文なりと開悟院師常に申されたり。而して『月藏經』九<sub>二</sub>には五ヶの五百年の説ありて、『安樂集』初に之れを引き時機相應せざれば無益なることを明し、『同』上<sub>三</sub>に龍樹二道の判を『論註』に依りて引き、辯に至りて二門判を設けたまへり。こゝに注意すべきは『涅槃經』に一切衆生皆有佛性因と説き、遠劫以來には多佛の出世に逢ひ(緣)たるべきに、今尙流轉の凡夫であるは如何と問ふて、二門判が出てたることは是なり。この問題は今亦新しき問題たるを味得せざるべからず。宗祖が「信卷」序に「沈自性唯心貶淨土眞證」と云ひ、「化卷」四<sub>五</sub>に

『安樂集』を四文引き終りて後に「今時道俗思量己分」と嚴誠を垂れたまへるも、能く時機を自省して針路を誤るなどの慈誨なり。「化卷」三十四及三十五をも可<sub>レ</sub>見。

右の如き故末法の今時眞宗の教行信證が獨り盛んなる趣を顯はさんとして、綽公の偈には四法を次第の如く二句づゝに讚せられたと申すことなり。尙善導以下の偈もやはり二句づゝ四法に分けて分科したる人もあれども、強いて云はゞ配當出來ぬてもなかるべけれども、文のまゝに義を取るを祖意と存ずる故、善導以下では強いては配釋せざる考なり。尙道綽の章は『和讚』も『二門偈』も同じく末法濁世の相を際立て、明し、時機を悲引するの切なる祖意を注意せらるべし。『和讚』に云はく、「本師道綽大師ハリス、メシム」。「末法五濁ノ衆生ハトキタマヘ」とあり。今二句の註とすべし。『正像末和讚』五十八首は即ち此二門の興廢を示すものゆゑ、參照せらるべし。

近來末法思想の興起に關する説が、大分盛んに論ぜられたるを見る。或は此思想は支那の隋末唐初より諸師の間に起り唐朝に於て盛んなりと云ひ（矢吹氏の『三階教の研究』三〇）或は北周武帝の廢佛に刺激されたと云ひ（塚本善隆氏「房山雲居寺と石刻大藏經」東方學報東京都第五の副卷）或は内部的理由として持經者への觀察教團生活への反省に由ると云ふ（戸川靈陵氏の「宗教批

判としての末法思想」（研究））。右等を最近結城令開氏の「支那に於ける末法思想の興起」（『東方學報』東京第六）に紹介し、周武の廢佛より二十年前に已に慧思禪師の立誓願文に見ゆ。思師四十五歳までに成れる願文なれば、それは北齊、文宣帝天保九、北周、明帝元、陳、武帝二年に當ると論ぜられたり。右等の説より試に末法思想の由來を考察すれば左の如き歟。



道綽禪師は右の内、内部の時機反省が主因にて、それは『月藏經』等の説に依りて痛感せしめられたまひしものと思はれる。我朝平安末期より鎌倉時代へかけての先徳の著述や行跡を見ても思ひ合はするものあるべし。要之求道心の切なる者のみ之を痛感するを得ん。現代の我等たらんもの、いかにも末法なるを思はずしては居られぬであらう。綽禪師が「當今末法是五濁惡世」（『樂集』上三十三、三十四、三十五、三十六）と仰せられ、宗祖が「今時道俗思量己分」（『化卷』自釋と）のたまひしは之に在り。『正像末和讚』が「如來ノ遺弟悲泣セヨ」に始まれるを思ふべし。

萬善、自力、貶、勤修、圓滿、德號、勸、專精

【科意】 此二句は第二に萬行と念佛との二行の貶勸なり。

【解義】 萬善自力貶勸修。圓滿德號勸專精は、これ二行の貶勸なり。萬善とは萬行諸善。「化卷」<sup>四〇</sup>に道綽は萬行、善導は雜行、懷惑は諸行と云へりと。「選擇」の二行章私釋に依りて示したまふ。今此二句は「樂集」處々に依りたまへども、下<sup>三</sup>所修萬行但能廻顧莫不皆生。然念佛一門將爲要路」と云ひ、「同」上<sup>三</sup>難易二道を釋する處に、「一切行法皆有自力他力」等と第十八願を取意して他力を勧めたまひ、或は上<sup>六</sup>「觀經」の宗を明す處に「依諸部大乘顯念佛三昧功能不可思議」此念佛三昧即是一切三昧中王故也」と、此文「行卷」<sup>三三</sup>引用あり。或は下<sup>六</sup>に「諸餘三昧若若能常修念佛三昧無間現在過去未來一切諸障皆除也」とか、或は下<sup>六</sup>に「大經讚」云と「彌陀偈」<sup>七</sup>に依りて「若聞阿彌陀德號」等と名號の大利を讚じてあり。これらの文は「行卷」<sup>三三</sup>に引用あり。又上<sup>三</sup>縱使一形造惡。但能繫意專精常能念佛。一切諸障自然消除。定得往生」とあり。「選擇」教相章所引にて「道綽和讚」の據となりし文なり。善導と異りて廢立の相は、きびしく見えざれども、二行の貶勸は「樂集」一部に顯はれたり。特に聖淨二門判の易行道の下に、第十八願を取意したまへる所な

ど專精を勸むる意の切なるを見る。その終りに前引の縱使一形の文あり。「道綽和讚」の「鸞師ノオシヘヲウケツタヘ」以下四首は、此二行貶勸の意を主として示したまへり。今偈の自力は他力に對す。圓滿德號は萬行の小善に對す。二句互顯したるものなり。注意すべし。「安樂集」に於ては時衆を誘引せんとして緩急其宜きに隨ひたまひて、悲引の意の在る所を窺ひ奉らざるべからず。

三不三信、誨慍、像末法滅同、悲引

【科意】 第三に三不信と三信との得失を示して悲引したまふことを讚ず。

【解義】 三不三信誨慍。像末法滅同悲引。これは三不三信で信を勤むる處。鸞師は「論註」下<sup>二</sup>讚嘆門下に稱名の如實不如實を明すに此の三不信を委しく明し、「與此相違名如實修行。是故論主建言我心」と結す。此文大切の釋にて「信卷」<sup>四</sup>に引用したまふ。「和讚」では之を曇鸞章に讚じてあり。先づ三信とは淳心等にて、本願の三心とは左右あり。本願の至心信樂欲生は横に並びて、皆無疑の故を以て論主之を一心と合三爲一したまへりと「信卷」<sup>四</sup>今鈔<sup>七</sup>の問答に釋してあり。然るに此淳一相續の三信は其一心を堅に示されたので、一々みな信心の相なる故、「論註」には

信心不淳等と云へり『樂集』上釋亦同じ。即ち淳心は淳朴の心すなほに信じたる心なり。これが論主の一心なり。『論註』上釋の一心の釋に念無碍光如來とは、今の信心の一心なる相にて、餘佛餘善に心のかゝらぬ決定の一心なり。又心々相續無他想問雜とは昨日も今日も相續して餘念の雜らざる專一の信心なり。之を今相續心と名く。如此信心を三信と開きたるもの故、今鈔註一心の轉釋に之を出だす。「信卷」末釋亦同じ。然れば淳心一心相續心は一信心としての三信なり。こゝに海釋とあるは、『論註』にはたゞ三不信の方のみを詳述せるに、『安樂集』上釋に更に三信の方をも詳述し、而も「具此三心。若不生者。無有是處」と結したまひて、『觀經』の語と本願の文とを取り合はして、此三信即信心を具する者は必ず往生を得るぞと慇懃に示したまふたことを云ふ。『二門偈』の道綽章に照らせば、能く此旨を會得せらるべし。像末法滅同悲引とは、道綽出世の時代は末法の初ゆるゑ、像末法滅の時機に對して、此淨土一門を開示したまふを云ふ。前の二門決判より此三信を示して、いよく專修專念の信心を決定せよと顯す祖意なるべし。

一生造惡遇弘誓 至安養界證妙果

【科意】 第四に往生即成佛の證果を嘆ず。

【解義】 一生造惡遇弘誓。至安養界證妙果。造惡の凡夫が直に往生成佛すと云ふこと。一生造惡とは『觀經』下品の惡人。弘誓とは第十八願。遇は値遇、『銘文』本釋に依れば信することなり。安養界とは『大經』の安養國にて安心養身の淨土、即ち眞實報上なり。妙果とは無上涅槃なり。『今鈔』證段を見るべし。扱此據は正しく『樂集』上釋の淨土門を明す釋にて、十八願を『觀經』下々品に合して、「大經云若有衆生。縱令一生造惡。臨命終時。十念相續。稱我名字。若不生者。不取正覺」等とありて、一形惡を造るもの、臨終に初めて本願を聞きて定得往生することを明す。今偈に至安養界證妙果と云へるは、『樂集』上釋以下彌陀の身土を報身報土と定め、凡聖通往を廣明す。此義は曇鸞相承にて亦善導楷定の基づく所なり。故に此句、據にはたゞ往生とあるを特に至安養界と云ふ。又『樂集』下釋彌陀現在不滅を見ると云へる終益の文や、『同經』往生彼國勝者。大經云至則到大涅槃。一切衆生但至彼國者皆證此益とある文に依りて證妙果と云ふ。而して一生造惡遇弘誓と第十八願の不思議力を顯し、以て最初の唯有淨土可通入の理由を結成したまふ祖意と窺ひ奉

る所なり。

此道經章は『廣本』の正信偈とは唯一字の異のみ。同異の論無用なり。

善導獨明佛正意（考） 深籍本願興眞宗（考）

第五善導偈二

初 嘆師別德

善導

二 依釋文讚二

初 矜機示法

矜哀

初 現益

入涅槃

二 明獲信益二

二 當益

得難

【科意】 第五善導大師の偈、初二句は其別德を嘆ずるので、古今を楷定して弘願眞宗を興行したまへりとなり。即ち教なり。

先づ師德を嘆ずる二句、初句は「佛の正意に明なり」の御點ては大師の自行、次句は化他の德なり。その興眞宗の義を下の六句に廣讚せられたるものなり。科文を照見あれ。若し又「佛の正意を明かにせり」の點ならば大師の化他を嘆ずる意となる。

【釋義】 善導獨明佛正意。深籍本願興眞宗。善導の傳は『漢燈』九に六傳を引く。

於中『新修往生傳』に長安と臨淄と二人の如く見ゆれども、元祖が十德を嘆ずるに同一人とし給へば、これは傳と云ふものは異聞を傳へたものと會し來たり。又導と道と別人かとの論あれども、これも同一人なること常盤大定博士の考證、『支那佛教史蹟評解』（考）唐隆闢大法師碑、（考）奉先寺盧舍那佛大像の處の考證に見えたり。又善導の捨身往生の事が例の『新修往生傳』や『淨土文』に見えたれども、此傳文は三百年も後の宋の編輯なれば、往々誤傳あり。唐の南山は善導と粗同時の師、其著『續高僧傳』を見れば柳樹より捨身したるは善導の門人なること明なり。文は『漢燈』卷九に出でたれば見るべし。

上杉文秀師昭和五年夏安居『禮讚講錄』、翌年刊行の『善導大師及往生禮讚の研究』に善導傳に關して詳辯あり。委くは其れを見るべし。捨身往生について師は自行門には許すべし化他門には許すべからずと會釋せり。予は是れ事實の問題なるが故に前辯の如く否定説に隨ふものなり。因みに善導忌日は三月二十七日と云ふが本願寺の傳なり。其本據は幸西輯録の『善導類聚傳』（惠空師書寫本）中の『帝王年代錄』なり、其文を出ださば左の如し。

帝王年代錄云。辛巳永隆二年三月二十七日善導和上亡。

『新修往生傳』に春秋六十九と云へるに依りて逆算せば、隋の大業九年(西六一三)の誕生となる。道綽は唐の貞觀十九年(西六四五)四月二十七日往生の善導と月は違へども、同く二十七日なり。

獨明を解すに七祖中にて善導を獨明と云ふと、淨影等の諸師に對して獨明と云ふとの兩説の中、これは七祖の總嘆の偈に開大聖世等とあれば、諸師に對したる語と見るが當前なり。佛正意とは正しく『觀經』を見るについて、諸師は往生の機を高く取り、所生の身土を低く見、而も往生行を定散諸善、特に觀佛理觀に重きを置きたるに、善導は機を惡人女人とし、佛土を報佛報土と定め、佛願の強縁に託して念佛往生するの大道を開示し給ふ。これが古今楷定の妙釋なれば獨明佛正意と嘆じたまへり。善導一代五部九卷に亘りて力をこめたまふ所これなり。諸師と善導との同異に先輩は或は二十異或は二十五異を數へて辯ぜられたり。深藉本願とは『大經』に土臺をすゑて、『觀經』を見て諸師を楷定されたること。興眞宗とは弘願眞宗を興隆すとなり。先づ『玄義分』の要門弘願を分かち、要門は此觀經定散二門是也とし、言弘願者如大經說等と第十八願を取意して引用し、『散善義』終には一經の付屬流通

の文を釋して「上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名」と釋す。明に『大經』眼を以て『觀經』を見て廢立の義を判ぜらる。これを以て元祖は『選擇集』に「若依善導以初爲正」とのたまふ。初とは廢助傍三義の初廢立のこと。されば『定善義』<sub>三</sub>の念佛衆生の釋、『散善義』<sub>下</sub>上品の化讚の釋等、みな本願によりて佛意を釋してあり。『玄義分』の要門弘願を『散善義』終りには「眞宗叵遇。淨土之要難逢」との給ふ。故に宗祖は之を「行卷」<sub>知</sub>と「化卷」<sub>知</sub>とに分引したまへり。今此一句は古今楷定の根柢を示したもので、元祖が『選擇集』一部「偏依善導一師」は、一々本願非本願を以て定規とせる故なり。それを能く見定めて此處に「善導獨明佛正意深藉本願興眞宗」とのたまふ。善導の楷定は機教身土に在る故、以下にその旨を示すこと、文を見て知るべし。

吾祖眞宗の語を經釋につけたまふにつき、『廣本』偈では元祖のみ、今偈では善導・元祖、『和讃』では『大經』と善導・元祖とに見えたり。依りて『大經』と二祖相承に當たる故、宗旨分相承と云はれる二祖に局りて用ゐたまふこと、見ゆ。これは案ずるに宗祖では元祖一師に依ることを顯す意と見るべし。故に『廣本』では元祖の偈のみに眞



宗と云ふ。その元祖は亦善導の釋を見て入信し給ひ、偏依善導一師にて『選擇集』を書きたまへり。故に『御本書』後序に「眞宗興隆大祖源空法師」と云ひ、『選擇』を嘆じては「眞宗簡要」<sup>云々</sup>とのたまふ。元祖は善導を祖師とし善導加減の文を御自影の銘として書いて宗祖へ付屬したまふ。故に善導に眞宗の語を用ゐらるゝことゝなる。善導は元祖を通じて眞宗の祖とする意ゆゑ、或は元祖に攝めて見る事あり。或は開いて善導を眞宗の祖師とすることもありと云ふことになる。宗旨分相承と云はれる『歎異鈔』でも、初に「親鸞ニオキテハ<sup>ハカ</sup>ヨ<sup>ヨ</sup>キ<sup>キ</sup>人<sup>ノ</sup>オホセヲカウムリテ<sup>云々</sup>」と云ふて、次に二佛二祖が出て、「法然ノ仰セマコトナラハ親鸞カ申スムネ<sup>云々</sup>」とのたまふ。『大經』に説かれたる本願眞實これが眞宗なり。元祖がそれを定規として本願非本願を判ずるに善導の釋に依りたまふこと故、二祖或は一祖に眞宗の語が出づるものなり。善導の處を見るに『和讃』では「眞宗念佛キ、エツ、<sup>云々</sup>」これは『禮讃』の本願相應を承けたる所なり。又『禮讃』<sup>云々</sup>の此經住百年を云ふに、「弘願眞宗ニアヒヌレハ」と眞宗を弘願とす。これは「玄義分」と「散善義」とを合したる語なること言ふまでもなし。元祖のことは一々舉示せずとも知るべし。『元祖和讃』の初に「弘願ノ一乗ヒ

ロメツ、」と云ひ、次の讚に「淨土眞宗ヲヒラキツ、選擇本願ノヘタマフ」とあるは注意すべし。元祖所弘の法を善導の語を以て弘願の一乗を弘むと云ふ。これ一面善導を元祖へ取りて見るべき意味とも見らるゝ。『御本書』後序の意と同義なり。然れば自ら宗旨分相承と云はれる二祖に眞宗の語を用ゐたまへる意も了解せらるべし。今偈には善導章に深藉本願興眞宗と云ふ。『和讃』の弘願眞宗とあると同じ。而して七祖をみな通じて眞宗の祖師とするは別辯を要せざるべし。「化卷」<sup>九</sup>釋迦諸佛の正意に次いで、「是以四依弘經大士三朝淨土宗師。開眞宗念佛。導濁世邪僞」とあり。又本師宗師の語を冠し給ふも眞宗の祖師の意味なり。一々文を出ださざるも、思ふて知らるべし。

矜<sup>シ</sup>哀<sup>シ</sup>定<sup>シ</sup>散<sup>シ</sup>與<sup>シ</sup>逆<sup>シ</sup>惡<sup>シ</sup> 光明名號示<sup>シ</sup>因緣<sup>シ</sup>

【科意】 釋文に依りて楷定の功を讃ぜんとして、淨土教の機と法とを出だす二句なり。即ち行なり。

【解義】 矜哀定散與逆惡。光明名號示因緣。一切衆生の機が定散二機なること『序分義』<sup>三</sup>に出で、「愚禿鈔」上<sup>四</sup>「化卷」<sup>九</sup>に引用なり。定は息慮凝心、散は廢惡修善

の機なり。今日所謂冥想的と倫理的との二類なり。若し『觀經』で云は、定善と上中六品が善機、下三品が悪機なり。下三品は十惡破戒五逆の輕次重の惡人、それを今逆惡とのたまふ。機の色を分かつたば如此なれども、宗祖は「化卷」に横川に依りて「觀經の定散諸機は極重惡人唯稱彌陀と勸勵したまへり」と云ふ。『玄義分』の定散致請の問題より和會門の廣明、此機の攝不を明にして、經の正意は全く爲未來世濁惡衆生に在ることを顯すに在り。今は經に准じて善惡を分つ意より與の字あり。

光明名號示因緣は『禮讚』の「彌陀世尊本發深重誓願。以光明名號。攝化十方。但使信心求念」の文に依り、『序分義』に「觀念法門」を以て示因緣と云ふ。

「行卷」兩重因緣の中、何れぞと云ふ論あれども、これは略して嘆ずるもの故、下に望むれば兩重に通じて解すべき文なるべし。「行卷」の初重は約法、後重は約機なれども、共に往生の果に望めて因緣を談ずるが正意なれば、光號の因緣にて得生することとなる。光明の緣に催されて正業の名號を聞信するとき、行者は往生を決定する。其信心が内因となり光號が外緣となりて得證する。故に此一句に兩重を含み、

それを次下に顯したまふものと窺ふ。

入涅槃門値眞心 必獲於信喜悟忍  
得難思議往生人 卽證法性之常樂

【科意】此四句は金剛眞心の現當兩益を嘆ず。必獲と云ひ、得と云ふは現當の別を示すなり。御點では得を定得とし給ふが如し。諸本の點大概之に同じ。福乘寺、西方寺傳の覺師延書は「忍ヲウ。往生ヲウルヒト」と訓ず。これならば後二句は當益なり。偈句の當意は寧ろこれならん。

【解義】入涅槃門値眞心。涅槃門とは『般舟讚』に「念佛卽是涅槃門」とあり。『六要』七に釋して「是顯稱名爲能入門以涅槃理爲所入城者。所入城者卽淨土也」と云ふ。『定善義』に「入彼涅槃城」とあり。眞心とは如來廻向の眞實心にて他力の信心を云ふ。即ち無漏の金剛心なり。『廣本』偈に「行者正受金剛心」とある是なり。それを獲るを値眞心と云ふ。今の文意は涅槃の妙果を開くべき念佛に歸入して他力の信心を決定することなり。

必獲於信喜悟忍とは信の現益を示す。必は他力自然なり。『序分義』に「心歡喜

故得無生忍」の經文を釋する處に、無生忍は聖道の無生法忍とは異り、往生を決定することぞと示す意にて「亦名喜忍。亦名悟忍。亦名信忍」とあるに依りたまふ。喜忍は知るべし。悟忍は「經」の得益分の廓然大悟に依る。明了に往生を覺悟することなり。これ即ち信心なる故に信忍と云ふ。前に必至無上淨信曉と云へるに思ひ合はずべし。先輩は無生の生たる往生を間違なく心に決定する信心の智慧をうることを無生法忍と云ふ。忍は忍可決定のこと。聖道の無生の理を證ると云ふとは異なり、第七觀の『定善義』第六の「應聲即現證得往生」て、攝取の光益を得て決定するが韋提の得忍なりと辯せられたり。曇鸞章の信心開發即獲忍の處も參照あれ。『廣本』には「與韋提等獲三忍」とあり。獲の字現益を顯す。

得難思議往生人。即證法性之常樂。難思議往生とは『法事讚』上初に雙樹林下往生難思議往生と合して三往生の目あり。吾祖『御本書』始め處々に之を三願三經三機に配して眞假の辨別を示したまへり。三往生は因に約し果に約して釋名することにて、十八・二十は共に念佛の行に於いて自力他力の機分かる、故に同じく難思議と云はるれども、議の一字の有無にて褒貶の意を存す。名號の不可思議功德に依るとせば因に約

す。即ち難思議之往生なり。又微妙難思議の淨土に往生して不思議の妙果を得ること、見れば難思議即往生なり。難思議往生は自力稱名ゆる教頓機漸となる。議の字を略して褒貶を示したまふ。因は自力の念佛。果は疑城胎宮にて化土なり。『六要』八二及『三經文類』第八化卷第四同第五等に見ゆ。雙樹林下往生は自力諸善の機の往生にて、因に約せば釋迦教なる故釋尊入滅の處に寄せて雙樹林下之往生と云ふ。『讚彌陀偈和讚』の七寶講堂道場樹の左訓に雙樹林下の往生とあるにて知るべし。釋尊始成正覺『華嚴』說法の處が道場樹なり。それに涅槃の雙樹林下の左訓あるは釋迦教を表するものなり。又化土は佛隱沒の相を見ること『安樂集』下三に出て『選擇集』末八約對章にも引用なり。佛隱沒の相あるより、應化身の釋迦入滅の處に寄せて、諸行往生の相を示す意で雙樹林下往生と云ふなるべし。然るに三願三經等に配することは『事讚』の當文にては明ならず。前二に彌陀釋迦諸佛の入道場を請する偈あり。後八には三經の説の略出あり。それらより配釋せられたるもの歟と解し來たることなり。得の字は當果を顯すこと可知。

即證法性之常樂とは、涅槃の妙果なり。『證卷』初『此鈔』五等について知るべし。

即證とは往生即成佛を顯す。今偈處々に現當の益を辨別して示し給ふ意を注意あれ。『玄義分』<sup>三</sup>に「捨此穢身即證法性之常樂」とあり。『六要』には「禮讚」前序の終を指す。『二門偈』<sup>終</sup>に今偈と同じく「到安樂土必自然即證法性之常樂」とあり。宗祖御晩年の御喜びのやうすが思はるゝなり。これによりて『廣本』の即證法性之常樂も當益なるを知るべし。『廣本』雲鸞章偈に信より直に證を出だす、『善導和讃』の「煩惱具足ト信知シテ」<sup>云</sup>の讚など亦然り。これは聖淨二門の得果を相對して、具足煩惱の凡夫が信の益として臨終の夕直に往生成佛を超證するを顯さん爲なり。誤りて一の益計に墮する勿れ。淨興寺本に「得ル人ナリ」と點ずる處では前句に接して定得の意と見らるれども、獲得二字を使ひ分けられたる處では、後二句を當益と見るが當意なるべし。

○善導章偈の同異(同異第二十四)

善導章に『廣本』になき深藉本願興眞宗の句、得難思議往生人の句があり。『廣本』の開入本願等の三句と今偈入涅槃門等の二句と語句の變はれるは如何。謂くこれは大體互顯の意なるべし。先づ深藉本願興眞宗は前句の獨明「佛正意」が「正意ヲ明カ

ニセリ」の點なれば化他なる故、それを廣讚したるものなり。善導大師「觀經」を釋するに、弘願よりすべてを看破したまひたので、定散諸善を廢して弘願念佛を立つるを興眞宗と讚じたまへり。故に後の元祖章に眞宗教證等とあると同意なれば、二祖相承の義に當たれり。これは後にも申さん如く元祖を通じて善導を見たまひたる意なり。元祖は偏依善導。善導は釋迦彌陀二尊の正意を明す。これが二祖相承にて、天台の宗旨分相承に配せらるゝ所なり。故に今偈は安心爲要の書なれば此句を加はへたまへるものなるべし。又得難思議往生人の句は即證法性が當來の果なることを明かにするものなれば、『廣本』に略されたるを今偈に明示したまへるものなり。次に今偈の涅槃門は念佛即是涅槃門なり。『廣本』の本願大智海も本願の名號智慧の念佛なり。故に入涅槃門も開入本願大智海も同じことなれば互顯なり。今偈の入涅槃門眞心は如來の眞實心が行者の信心となる故、信心をば「マコトノコ、ロ」と訓む(『最要鈔』<sup>論</sup>「御文」<sup>一</sup>、<sup>二</sup>)故に如來廻向の金剛心なり。『廣本』の「正受金剛心」と同じことなり。『廣本』は『玄義分』に依りて造語し、今は『序分義』<sup>註</sup>等に依りて造句して互に顯すものなり。金剛は無漏之體<sup>〔定善義〕十五左</sup>なれば、凡夫所發の心には非ず故に

「金剛真心是名眞實信心」〔信卷〕と仰せられたり。右の次第は「信卷」本〔信卷〕の引文と御自釋とに顯はれたり。

源信廣開一代教、偏歸安養勸一切、

第六源信偈二



【科意】 第六惠心僧都の偈なり。其中先づ嘆師德の二句自ら師の自行化他の徳なること知るべし。

【解義】 源信廣開一代教。偏歸安養勸一切。源信僧都は叡山の横川首楞嚴院に住し、慈惠門下の俊才にて檀那院の覺運僧都と並びて、惠心院の先徳と稱せらる。傳は『元亨釋書』卷四等に出づ。山家傳教大師の遺命を受けたる慈覺大師により常行堂が建設せられたるが、二百年後の惠心僧都に至り、願生淨土を目的とする常行三昧の念佛となり、後世元祖吾祖の在山時代は全く往生淨土の念佛が盛んなり。惠心は一代經を五遍も閲し、而も善導の『觀經疏』を取り入れて『往生要集』を撰集せら

る。これたゞ他を勸むるためでなく、序文に「如予頑魯者、〔五〕依念佛一門」と云ひ、正修念佛門には「我亦在彼攝取之中」〔云〕の喜びとなり、念佛證據門の極重惡人無他方便の勸勵となりて、自行化他たゞ彌陀を念じて願生したまひた故、今も偏歸安養勸一切と嘆ぜらる。『往生要集』は支那にも傳はり彼地の人が東方を拜して源信如來と禮し、我朝にては惠心在世より盛んに流行し、南北の學徒の間にも尊信せられて、幾度も開版せられたること詳述に遑らず。略して『淨土源流章講錄』上〔七〕（解説〔一〕）に記したれば有志の士可見。

源信僧都は天慶五年（西九四二）大和當麻に生れ、出家して叡山に登り慈惠大師良源の門に入り横川首楞嚴院の惠心院に住す。故に世に楞嚴和尚とも惠心僧都とも稱す。大小乘に通じて百二十部に近き多數の章疏を撰述す。一代經を閲すること五遍、博覽多識以て『往生要集』等淨土に關する著述あり。今は『要集』に於て如予頑魯者は自力の教行は叶はぬ故、念佛一門に依りて要文を集むるぞと其序に示し給ひ、廣く十門を開きて明し、終に信謗共に縁となりて往生せしめんとの意を述べ給へり。これを「今廣開一代教偏歸安養勸一切」と嘆じたまへるなり。而して寛仁元

年丁巳六月十日遷化し給ふ。壽七十六。これ元祖降誕百十六年前、宗祖降誕百十六年前なり。

『要集』は元祖歸淨の先達ゆゑ、集の見方を知らせんとして四部の書を著したまふ。それを指南とせば集の要旨は掌を見るが如し。了惠之を『漢燈』第六に收む。今より二百餘年前鎮西の義山、勝手に改竄加除し、題をも改め三部に縮めて刊行せり。これは以ての外的事なり。幸に先輩惠空師が寫傳せられて、今日其原型のまゝ拜見し得るは、末徒の幸慶なり。中外出版社より『古本漢語燈錄』と題して刊行せるは即ち是なり。予は『無盡燈』第二十四卷（大正八年三月）に新古の『要集釋』を仔細に對檢し置きたり。可見。

此處の香月院師偈の講義の版本は義山本に依りて校訂されたりと見えて、『往生要集大綱』と云ふて引用せり。『大綱』は義山の作りたるものなり。故に元祖の語のまゝに非れば用捨あるべし。元祖は『往生要集』に「釋」と「詮要」と「料簡」と「略料簡」との四部の作あり。それを見るべし。

尙予が所藏の『要集』は嘉永二年版大本七祖聖教ゆゑ、卷數など南條本と少異あり。南條本は嘉永年中間版の遺宋本と云へる西教寺版に依れり。それに對して從來の本を留和本と稱するなり。

### 依諸經論撰教行 誠是爲濁世目足

【科意】『往生要集』に往生の教行を以て濁世の目足としたまふを嘆ず。

【解義】依諸經論撰教行。誠是爲濁世目足。これ正しく『要集』の序に依りて集の大義を述ぶ。序に「夫往生極樂之教行。濁世末代之目足也。是故依念佛一門。聊集經論要文。披之修之易覺易行」とあり。『往生要集』と題す。要とは『要集』中本總結要行の處に菩提心と護三業と深信と至誠と常と念佛と隨願決定生極樂の七法を云へども、次に往生之業念佛爲本と云ふ。その念佛は正修念佛門では觀念の如く見ゆれども、觀に堪へざるものは、「或依歸命想。或依引攝想。或依往生想。應一心稱念」と勸め、又念佛證據門では「男女貴賤不簡行住坐臥」等とあれば、『要集』の本意は、易修の稱名念佛に在り。之を序に「往生極樂教行」等と云へりと見るが元祖の指南なり。『要集』は文は傍正意或は助正意の念佛の如く見えたれども、『集』の本意を見定めれば、遂に廢立位となる。『集』の當分は傍正位助正位ゆゑ、元祖も『選擇集』本助正傍正の處に『要集』を引用せり。故に往生之業念佛爲本も、助正位と見ゆれども、其本意に依りて元祖は本願の念佛と取りて『選擇集』の總標に之

を安ず。今偈に教行を日足に喩ふ。『大部四教義』一に『大論』八十三に依りて「日足備故人清涼池」と云へる如く、經論の教に依りて念佛の行を指示せられたることなり。諸經論とは『要集』所引にて知るべし。大藏を五遍も閲しそれを脇にして撰述せられたるが故なり。師御身天台に在りて初めて善導『疏』に著目し、能く時衆を引導したまへり。次の四句に其義を顯す。依りて此二句は『往生要集』の撰述を嘆じて、日本願生者の指針を示されるを嘆ずるものなり。此「往生極樂之教行」濁世末代之日足」と云へるが、後に元祖開宗の先馳となりたまへるものなり。

決判得失於專雜 廻入念佛眞實門

【科意】『要集』に專雜二修の得失を判じて念佛門に廻入せしむるを讚す。

【解義】決判得失於專雜。廻入念佛眞實門。以下四句は『正信偈』では二句に示さる。今偈は開きて四句とし給ふ。即ち初二句は文の如く雜修を捨て、專修念佛に廻入せしめんとて、其專雜二修の得失を決判したまふと示し、後二句には專雜二修を執心即ち信の淺深に約して、往生の果に報化二土の別あるを辨立して勸信する意なり。『要集』下末に問答料簡門の中に道綽の三不三信釋と善導『禮讚』の專雜得失の

文とを引用し、次に『菩薩處胎經』第二十八八種身品を引きて懈慢界を出だし、『群疑論』四の釋を以て專修は執心牢固、雜修は執心不牢固なるが故に、專修の者は報土に生まれ雜修の者は懈慢界に生まると決し給へり。(之を宗祖「化土卷」に引用せらる。『源信和讃』をも見るべし)元祖は『漢燈』第六の釋には「私云惠心盡理定往生得否。以善導道綽而爲指南也」。同『略料簡』終。同『料簡』終。同『詮要』にも意をこめて釋顯してあり。

抑專雜二修は能修の機について分別するもの故、大判では雜行を修するが雜修、正行を修するが專修と見られるれども、『選擇』二行章の私釋)たとひ正行を修するも、本願の意を了ぜざれば正雜兼行ともなり、『唯信鈔』が『持名鈔』(本)助正兼行並修ともなる(「化卷」)『善導和讃』これによりて惠心が專雜二修の得失を決判したまふことは、偏に專修念佛に歸入せしめん爲なり。それを今偈に「決判得失眞實門」とのたまへり。眞實門とは方便假門に對する語なり。廻入とは自力の心を廻して他力念佛に歸入せよとなり。元祖の『詮要』に今の『要集』を略鈔し終りて、「今據此等文惠心詮要引用善導專修二修決往生得否。而嫌雜修雜行。勸專修之

志。以之可知」と結示したまふ。委くは元祖四部の御指南を見るべし。今偈に得失とは専修は千無一失、雜修は千中無一のことなり。元祖が専修念佛を勧めたまふに至りし由來と其決意の存する次第も此先達あるが故なり。

唯定淺深於執心 報化二土正辨立

【科意】 信の淺深によりて報化の往生を辨立したまふぞとなり。

【解義】 唯定淺深於執心。報化二土正辨立。前二句に出でたる如く執心とは執持する信を指す。専修は牢固雜修は不牢固なり。これを淺深と云ふ。執心の深きは他力の信心なり。「化卷」に「觀經說深心。對諸機淺信故言深也。深者利他眞實之心也。淺者定散自利之心是也」とあるにて知るべし。報化二土は前引の報土と懈慢界なり。此の義は善導の專雜二修の得失を果の上より判ぜるものにて、懷感の『群疑論』に依りて示さるゝ所なり。即ち善導の釋を明了にせしが惠心ゆゑ宗祖當に之を嘆ぜらる。前引せし如く惠心は三不三信と専修雜修とを以て、明に能修の機について判ぜらる。元祖の『要集』四部の釋に此事を特に示したまふ。これ今家が善導に於て之を出ださず惠心の偈に示されたる所以なり。又懷感に依りて報化の辨立を明かに

せられたる故、之を傍依の祖とする意にて、「化卷」の引用にも「首楞嚴院要集引感禪師釋云」と標し、『和讃』にも「懷感禪師ノ釋ニヨリ」とのたまへり。今偈も『正信偈』も正辨立とある正の字注意あれ。辨立は辨別し成立したまふこと。

今家に於て報化辨立は明に惠心に依れり。然るに曇鸞以來一貫して彌陀の淨土を報土と定めたまふ。依りて惠心御身天台に在りながら、『要集』下末に本宗の祖師たる天台大師の說に依らず。斷じて道綽に依りて報土とす。往生の業因亦専修を勧めたまふ。これ淨土の祖と仰がれ給ふ所以にて、惠心なかりせば元祖の開宗は出でざるなり。而して宗祖、「化卷」始め處々の釋にて明なる如く化身土と云ふも報中の化にて應化の化に非ざること勿論にて「眞佛土卷」に願に眞假ある故佛土に眞假ありと云ひ、次に「既以眞假皆是酬報大悲願海故知報佛土也」と決してあり。これは常に出づること故略す。彌陀が化土を設くる願意は近く『末燈鈔』第二章の終に顯れたれば見るべし。

○源信章偈の同異(同異第二十五)

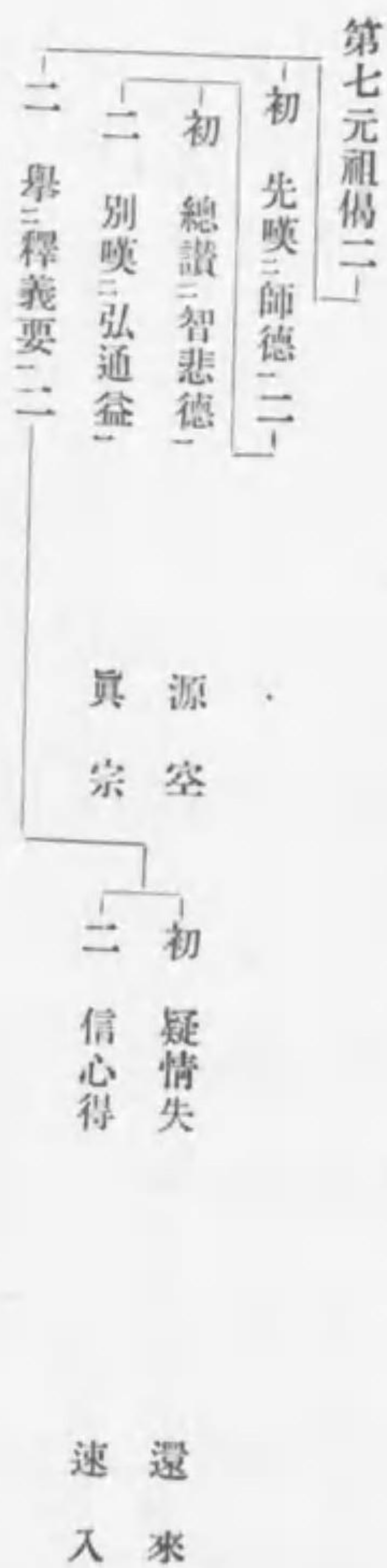
源信和尚偈中、依諸經論の二句は『廣本』偈に見えず、又『廣本』の專雜執心の二句



を今は四句に開き、又『廣本』の極重惡人等四句今偈には無し。此同異如何と云ふに、謂く『廣本』は廣開一代教を勸一切の化他にまで及ぼす意なるべし。今偈はそれを開きて依諸經論にて『往生要集』を撰述し給ふぞと嘆し給ふ。『要集』の序に「夫往生極樂之教行濁世末代之目足也」と起筆し給ふたは、聖道の外に濁世の爲の淨土の教行あることを申す意なれば、今偈は特に七祖弘通の恩を感謝したまふ意厚きが故に、依諸經論等の二句が加へられたるものと見ゆ。又『廣本』の專雜執心等二句を四句に開くも、元祖門下の人々の定散の自力心に惑へる者多きが爲に勸誡したまはん御意より出でたるものならん。又『廣本』の極重惡人唯稱佛の句は、今偈で前に撰教行と云ひ專雜報化を判じたる所に攝めたまひ、執心牢固の信心より一向專修の念佛を修せよと顯す祖意ならん。又我亦在彼等三句は横川僧都の自行の語にて金剛心の相なること「信卷」本（七）に引用して、善導疏の金剛心決定の助顯とし給ふ文なり。今偈ではそれを執心深厚の中へ攝めたまひしものなるべし。要するに偈の事ゆゑ句數字數に限りある故、兩本の偈互に影顯したまふものなるべしと窺はるゝ。

源空 曉了諸聖典、憐愍善惡凡夫人、

眞宗、教證興片州、選擇本願施濁世、



【科意】 此科は『六要』に准じて分つ。初四句は元祖聖人は廣く佛教に通曉して我等を憐愍したまふ悲智の徳を嘆じ、別して眞宗を興行して選擇本願を弘宣したまへりと。

【解義】 源空 曉了諸聖典。憐愍善惡凡夫人。元祖の傳は『拾遺古徳傳』あり。鎮西には『四卷傳』、『四十八卷傳』(「黒谷傳」、彼家には「勅修傳」と稱す)等あり。西山には『法藏寺傳』あり。聖覺法印の作と云へる『十六門記』一卷あり。我が聖人元祖の法語を集めたまへる『西方指南抄』あり。高田專修寺に御眞筆を存す。其中に『源空上人私日記』あり。それと『元祖和讚』とが元祖直弟の所記として尊きものなり。

先年河内金剛寺より敬西集と云はれる『明義進行集』發見刊行されたれども、惜哉元祖傳の分は欠けて傳はらず。又醍醐本の『法然上人傳』發見刊行せられたり。何れも中外出版社の出版なり。又近來金澤文庫(相州)より、稱名寺所傳の『三部經大意』や、長樂寺・九品寺・鎮西流の古寫本なども公開せられたるあれば、これらの書にて、ますく元祖の正意が今家御相承と違はざる旨が明了になりゆくことも亦昭代の慶事なり。

元祖は承安五年四十三歳の春善導の一心專念の文に見當たりて歸淨したまふまでに、已に一代經を五遍御覽せられ、『善導疏』八帖(除『舟讚』)も前後八返見たと仰せられたる程ゆゑ、今曉了諸聖典と云ふ。『廣本』には明佛教とあり。憐愍善惡凡夫人とは、「念佛の弘まる處即ち我が道場なり」の仰せの如く、御一代眞に身命を堵して專修念佛を興行したまふ。これ凡夫出要の肝心にて彌陀選擇の本願なるが故なり。元祖所弘の念佛をたゞの念佛と思ふべからず。一向專念の行なり。師弟御流罪も全く之が爲なりしこと信空上人の御語に見ゆ。眞に矜哀の大悲より出づ。憐愍等とはこれなり。而して建曆二年正月二十五日遷化。壽八十歳。吾祖四十歳に當りて勅

免後尙越後御滯在中なり。

信空上人の語は『四十八卷傳』の第三十三卷に出でたり。『大日本史料』第四編の八、建永元年二月十四日の條。『同』九、承元元年二月十八日の條を參照あれ。

眞宗教證興片州。選擇本願施濁世。此處の事は『元祖和讃』に照らして見るべし。『木燈鈔』等常に出づる如く定散二善は方便假門なり、選擇本願は淨土眞宗なり。これ善導の正意を傳ふる所。元祖は二門相對にて淨土宗を開かれたれども、其宗は選擇本願を弘むるゆゑ、弘願眞宗なり。吾祖常に元祖を讃ずるに、「弘願ノ一乘ヒロメツ、」等と云ひ、「淨土眞宗ヲヒラキツ、選擇本願ノヘタマフ」と、本願の念佛なれば自力の心を以て修せらるべき行に非ず。不廻向の他力の大行なり。必ず信心を以て奉行すべきゆゑ、次に信疑の得失を決判して信心爲能入とのたまふ。吾祖元祖の教を受けたることを「辨雜行分歸本願」と云ひ、「轉入選擇願海」と仰せられたるは此の旨を示すなり。教證とは教行證又教行信證の略。三法四法を眞宗の教として往生成佛をうるを教證と云ふ。次句に選擇本願は行、還來等四句は信證なり。『選擇集』の所明の當相は教相章二行章を明しその行を成ずる爲に後の十四章を示す。此

點ては教行なり。『御本書』後序に「眞宗簡要念佛奧義攝在于斯」と嘆ず。教證と云へば先輩も申されたる如く「化卷」聖道諸教行證久廢たれたるに對し淨土の眞宗はますく往生成佛の證道盛んなるを云ふ意なり。聖道は今時有教無人、淨土眞宗は在世正法像末法滅の群萌齊しく悲引したまふ（「化卷」こと、「十地論」一の教道證道に例知すべきなり。「十地論」の文は「十地義記」一末「探玄記」九「大疏」三十四上辯及び「大乘義章」九辯に釋あり。興片州とは粟散片州にて、今は日本を指す。かゝる片州に元祖の出世したまひたは全く彌陀觀音勢至の矜哀の深きによるを感謝する意。『和讃』に照らして知るべし。

選擇本願とは廣くは往生の因果佛身佛土みな選擇成就ゆゑ、四十八願に通ずれども、今こゝに選擇本願と指すは四十八を攝歸したる第十八願なり。『選擇集』の本願章を見るべし。元祖の『和讃』を見るに、初に善導の語に依りて「弘願ノ一乘ヒロメツ、」と云ひ、次に「淨土眞宗ヲヒラキキツ、選擇本願ノヘタマフ」と云ひ、而して宗祖自らの遇法を喜びて、後に「粟散片州ニ誕生シテ念佛宗ヲヒロメシム」とのたまふ。されば念佛往生を弘めたまふたことを選擇本願施濁世と嘆じたるものなり。

濁世とは濁惡世なり。『和讃』では「片州濁世ノトモカラハイカテカ眞宗ヲサトラマシ」とあれば、時機を兼ねたる言なり。「化卷」に「濁世道俗善自思量己能」とも、「八時道俗思量己分」ともありて、時衆に反省を促し、元祖の教に信順すべきを勸むる意あり。施は廻施。「十二禮」の「廻施衆生彼國」の語より取りたまふなるべし。

還來生死流轉家 決以疑情爲所止  
速入寂靜無爲樂 必以信心爲能入

【科意】 釋義の要は信疑の得失を判じて勸誡するに在りと。

【解義】 還來生死流轉家。決以疑情爲所止。以下の四句は三心章の意。「六要」三辯には「還來以下二行四句。就選擇集。舉釋義要。所謂當知生死以下二十言意」とあり。然れば「選擇」一部の要は勸信誠疑にきはまることを顯す文なり。「選擇集」は初に教相二行の二章を以て、淨土の一宗は本願の念佛を弘通する宗なるを示し、本願章に於て彌陀選擇の願意は勝易の徳ある念佛に在るを成じ、三輩章には其機は三輩九品と種々に分かれども、廢立の正意を以て「九品之行唯在念佛」と決せらる。

然れば本願の念佛は不廻向之行なれば、三心章に至りて、「念佛行者必可具足三心之文」と標し、廣く『觀經』と善導の『疏』文を引き、私釋には三心は行者至要と云ふて、深心の下に當知生死等と信疑の得失を明し、「涅槃之城以信爲能入」等と云へり。吾祖之れを傳へて積極的に他力廻向の宗義を開闡したまふに、行の本願なると共に、信も選擇の願心より發起せしめたまふゆゑ、「信卷」の問答の初に「涅槃眞因唯以信心」とのたまふ。行より信を別開して信心正因を眞宗とするは、全く元祖の相傳なり。吾祖『御本書』「行卷」に『選擇集』の總標總結の二文を引き、『選擇集』全部を引くことを顯し、次の自釋に明知等と結成せらる。元祖の正意は『選擇集』に在る故、特に「源空集」の撰號まで安じたまふ。右の旨を知るには其下の『六要』を見るべし。本願の念佛即ち廻向の行なる故、信心が肝要なり。『六要』に釋義の要とあるは此旨を示すものなり。聖教を拜見するには先づ句面の如く窺ふべし、その上にて師傳口業はあるべきなり。御指南あり。『此集』を窺ふこと諸先輩各々全力を傾けて研讀せられたることなれば、それについて見るべし。近來老南師は文相に依れば教相二行の二章、文義に就けば本願章を本とす、文旨に依れば三心

章にきはまると辯ぜられたり。味ふべき説と存することなり。

文を解すに生死流轉家とは我等曠劫以來の火宅なる故なり。『歎異抄』に「久遠劫ヨリ今マテ流轉セル苦惱ノ舊里」とあり。還來とは所謂まひもどること、自力かなはて流轉せるを云ふ。所止を種々に義を付くるなれど、疑情の爲に止めらるゝこと。次の能入に對して所止としたので、所は軽く助辭と見るべし。先輩は『四教儀集註』下世に所接之教を釋して、「所即語辭」とあるを例に引かれたり。

此偈四句の語遣につき先輩は『散善義』の機法深信の釋に依るとして、「誠疑の文は機深信の文、勸信の文は法深信の語に依り、無疑無慮乘彼願力定得往生の信心なり」と辯ぜられたり。三心章の出文に長々三心釋を引用したまひ、私釋の深心の處に當知生死の文あるゆゑ、機の自力無功を知りて法の他力を信ずる意に相當するより、元祖の釋を頌するに二種深信釋の語を以て造句したまひたものなり。元祖當知生死の次に「故今建立二種信心決定九品往生者也」とあり。

速入寂靜無爲樂。必以信心爲能入。寂靜無爲樂とはみな涅槃の異名なり。前の證の下や「證卷」の轉釋及「眞土卷」所引の『涅槃經』に照らし見るべし。樂をミヤコ

と訓ましむるは「廣韻」に樂の音洛に通ずるゆゑ洛陽の都にかよはせたものなりと先輩は申されたり。三心章に涅槃之城とあれば、涅槃の常樂を苦惱の家に對せしめたること思ふべし。必<sup>〇</sup>以<sup>〇</sup>等<sup>〇</sup>は信心を能入の因とするなり。必<sup>〇</sup>は必定とも必然とも見るべし。速<sup>〇</sup>入<sup>〇</sup>は宗祖「一論」の速得菩提に合する意なるべし。これによりて「超證無上正眞道」の横超の益を顯す意なり。

宗祖「尊號眞像銘文」末には元祖の釋を出だすこと、總標・總結・三心の三文なり。然れば選擇本願施濁世の句に集の所明を攝め、これを信心を以て如實修行すべしとて勸信誠疑したまふ意なり。

依經分の終には如何疑惑等と信疑を對辨し、今は依釋分の終りに至りて元祖を以て信疑の得失を示す。勸誠の切なるを思ふべし。

論說師釋共同心

拯濟無邊極濁惡

道俗時衆皆悉共

唯可信斯高僧說

【科意】 依釋分の總結勸信なり。

尙上來の偈の本文及び訓點は、御本山所藏の越後淨興寺所傳の本に依りて牒文す

ること入文の初に述べたり。

【解義】 論說師釋共同心等。論說とは依釋分總標の印度の論家、師釋とは漢和の五祖を指す。偈の句數では鸞師を龍天と同じく十二句なるより、上三祖を論家とすべき義あれども、總標に准れば論說は上二祖と見るが當前なるべし。共同心は知るべし。拯濟無邊極濁惡の語は「大經」の拯濟無極、「如來會」下<sup>下</sup>の拯濁世、「安樂集」上<sup>上</sup>の爲盡無邊生死海（「化卷」終所引）の文に依る。

道俗は在家出家、緇素と云ふも同じこと。「銘文」本<sup>本</sup>に釋あり。時衆とは當時の衆と云ふこと。善導の偈に依る語なり。皆悉共とは文の如し。善導は莫不皆乘と云ひ共發金剛志と云へり。七祖の同心に對して我等時衆皆同一に信心海に入れとなり。尙皆悉の語は「經」に皆悉到彼國とも説く。「經」は聞名の益につく。今は勸信ゆゑ、其義は同じからざれども、信海に入れれば皆悉く同心なり。唯可とは「散善義」<sup>五</sup>第六深信の文に「唯可深信佛語專注奉行」とある文（「信卷」<sup>五</sup>引用）に依る。今は上の唯信釋迦如實言と對望して、唯有淨土の眞説を忝くも三國の祖師各々傳持開闢したまひた故、他を顧みず此高僧の説を信ぜよとなり。これ廣略「文類」の序に自

慶を述べたまひて、愚禿勸むる所更に私なき故、これを信ずべしとの結勸なり。

尙『廣本』では同心の語を所化に約して道俗時衆に屬す。今偈は能化に約して論釋に附けらる。互に顯し給ふこゝろなり。

六十行一百二十句偈頌已畢

【科意】 偈の行數句數を結す。一百の一の字有無異本あり。

【解義】 六十行等。これは句數を結す。四言五言の偈は四句一行、七言偈は二句一行なるが定まりなり。『金光明文句記』會本三註に見ゆ。今偈の行數句數は『廣文類』正信偈と同じ。偈の依釋分は大同なれども、依經分は大異あり。最初に申したる如く『廣本』は建立門教相を主とし、此『略本』は趣入門安心爲要の所明ゆゑ、偈文の上にも如此相違のあらはれたるものならんと窺ふ所なり。又兩偈の所明に注視せば、實に一字一句不可加減にて、略するにも略されぬゆゑ各六十行百二十句に結びたまひたものなり。眞宗教義の歸する所を示したまふたことが知らるゝ。此旨は科節について思ふべし。

尙懸談最初課誦の處に申したるごとく蓮師より『正信偈』『和讃』の勤行式が定まれるが

亦一方に偏執して三部經や善導の『本疏』『選擇集』などを讀む人を文沙汰する者と申すに至れること、『帖外の御文』に見ゆ。古は佛前三部經ヲオク人ヲサヘ雜行ノ人ナリトイヒ侍ル」ともあれば已前よりもありたる如くなれども、蓮師の勸化によりて却りてそれに傾く者多くなりしが如し。蓮師山科時代文明十二年七月二十七日の奥ある『御文』にも亦無年月の御文にも見えたり。文明十二年のは『蓮如上人全書』帖外三十五通『御文全集』帖外六、無年月のは『同全書』拾帖其二の四十八通『同全集』九七通に出でたり。何事も極端に走りやすきものなり。

上來 尊命により不敏をも顧みず略して『念佛正信偈』を講讀し、又『廣本』正信偈との同異一斑をも窺ひ奉りたり。大概諸先輩の指南に隨ひたれども、たま〜私解にわたりたる所あり。取捨を希ふ。宗門多事の秋たゞ令法久住の縁ともがなと念ずる外はない。こゝに一夏魔事もなく、本日滿講に及ぶこと 御冥加の至り難く有存じたてまつります。

淨土文類聚鈔 念佛正信偈講讚終

昭和十一年七月五日 印刷  
昭和十一年七月十日 發行

非賣品

著者 住田智見

發行者 齋含雄  
京都市上京區小山上總町大谷大學安居事務所內

發行所 安居事務所  
京都市上京區小山上總町大谷大學內

京都市下京區正面通烏丸東入  
廿人講町二十番地

印刷者 西村七兵衛  
印刷所 法藏館印刷部

終